

理想と現実のはざままで

— あいまいな私 —

加藤 恵梨

1. 周囲における「主人」の使用を振り返って

友人の多くが既婚者であるが、会話の中で、「主人」はもちろんのこと「夫」という言葉も聞くことが少ないように思う。というのも、話題は専ら自身の仕事や趣味、健康に関することであり、それらについて話したいことが多いせい、家族のことに話が及ばない。宇佐美（1997）は「自分の使う言葉が自分の思考法や行動にまで影響を与えるということに、そして、ひいてはそれが社会全体の価値観にまでも影響を与え得るものだというところに、みんなが気づかないとね」（p.65）と述べている。現代の女性が「主人」や「夫」という言葉を使わず、「私」を主語として話すことが一般的になっているのであれば、女性の思考法や行動が家族ではなく、「私」中心になってきていると捉えることができる。とはいえ、人に自身のパートナーのことを言う必要がある時には、私の周りの多くは「夫」と言い、話し相手のパートナーのことを言う時には「（名字）さん」「旦那さん」を用いることが多い。（しかし、「旦那（さん）」という言葉も「主人」と同様、問題があるだろう。）このように、「主人」という言葉を使うのは適切ではないと強く思っているが、他により適切な表現が思いつかず、「主人」と言ってしまう場合もある。以下でいくつかの例を取りあげる。

2. 「主人」を使ってしまう可能性が高い場合

2.1 目上の人 (のパートナー) に対して

- (1) あの時代に東京女子大にお入りになり、結婚もなさり、お子さんも育てながら洋裁の学校に入って勉強して、デザイナーになった方です。ご主人の励ましも良かったのだと思います。めったに存在しない、優れた女性。森英恵先生。お疲れ様でした。

(2022年8月18日、朝日新聞)

(1) は、日本を代表するファッションデザイナーである森英恵氏が亡くなったことを受け、俳優の黒柳徹子氏が報道各社に向けて発表した追悼文の一部である。(1) のように、尊敬する先生のパートナーのことは「ご主人」と言ってしまうそうであるが、どのように言ったら良いのだろうか。

- (2) 「キッチンひとつ作るにしても、ご主人は奥様のリクエストを生かそうとするけど、奥様には別のニーズがあったり……。こんな風に家族が話しあう中で、家族の人となりやお互いの思いが家に反映されていく。それが見える番組でありたいと思います」。

(2022年8月31日、朝日新聞)

(2) はテレビ番組プロデューサーが、番組作成協力者である夫婦について他者に説明しているのであるが、このような場合にも「ご主人」「奥様」と言ってしまうそうである。

2.2 面識がない人のパートナーに対して

- (3) 人生は「正負の法則」。でも、その前に結婚や子どもで幸せになるかは分からないものです。ご主人は大企業を早期退職されたのですね。

(2022年9月10日、朝日新聞)

(3) は読者から寄せられた悩みに対する識者の回答の一部である。見ず知らずの相手のパートナーを (特に非対面で) 呼ぶ場合にも、「ご主人」を用いてしまうそうである。

2.3 公的な場で

- (4) 「旦那さんの怒鳴り声がしょっちゅう聞こえてきてねえ。酒飲みで、

酔って路上に寝ているのを奥さんが連れ帰って……。奥さん、お気の毒になって思っていました」

(2022年8月8日、朝日新聞)

(4) のように、新聞の取材などで近所の夫婦について聞かれて説明する場合、近所の夫婦をどのように呼ぶのが良いのだろうか。

(5) 「主人が愛した山口県、私も本当に大好きで、これからも、この地域のために何かしら活動をしていきたいなと思っています」

10月15日、山口県下関市で行われた安倍晋三元首相の県民葬で、喪主の妻・昭恵氏 (60) が遺族代表としてあいさつした。

(2022年10月23日、朝日新聞)

喪主である安倍昭恵氏が遺族代表としてあいさつをする際、安倍元首相のことを「主人」と言うのも理解できる。

「主人」という言葉を使用すべきではないと思いつつも、上であげたような状況に遭遇した場合、咄嗟に適切な表現が思いつかず、「主人」と言ってしまうそうで、葛藤を抱いている。

[引用文献]

宇佐美まゆみ (編著) (1997) 『言葉は社会を変えられる：21世紀の多文化共生社会に向けて』 明石書店。

(かとう えり・愛知教育大学准教授)